

尾形英二氏を悼む

千原光雄*

尾形さんは昭和47年12月17日に卒然と逝ってしまった。仕事熱心の尾形さんは、このところ続いた学園紛争による研究の遅れをとり戻すべく、日曜日の17日に研究室にいた。そして突然倒れた。尾形さんは再び立たなかった。病名は急性心停止という。享年46歳であった。水産学及び生物学の分野で、22年間の永きに亘りほとんど絶えることなく成果を生み続けた。もっとも活発な研究者の一人を失った。

尾形さんは旧制神戸二中、旧制第六高等学校を経て京都大学農学部水産学科に学び、卒業テーマに海藻の研究を選んだ。卒業は昭和25年であった。そして卒業後、大阪市立大学理工学部生物学科の助手となった。当時の尾形さんは海藻の分類や生態などの面の指導を九州大学の瀬川宗吉先生に仰いでいたが、同時に海藻の生理にも興味をもち、同じ教室におられた植物生理学の専門家の方達（高田英夫博士や永井進博士ら）と共同で海藻の生理学的研究も行っている。後年の尾形さんの幅広い研究活動の基礎はこの時期に培かれたものと思われる。私事に亘って恐縮であるが、私が尾形さんと知り合ったのは昭和26年である。尾形さんは今は亡き瀬川先生としばしば伊豆の下田臨海実験所にこられた。冬休み、春休みそして夏休みと、延べにして1年の¼近くはここで過ごすほどであった。この状態は数年続いた。ともに一人ものの気安さもあって、私たち二人はしばしば互いの共通の興味について徹夜で議論しそして仕事にいそしんだことを憶い出す。尾形さんはその後講師に昇任し、ついで昭和32年に招かれて水産大学の助教授となり下関に赴任した。ここでは水産植物学や増殖学を講じた。

ここ数年の尾形さんの学問に対する情熱はとくに私たちを眩せるものがあった。海藻を対象とした研究の分野は、個体生理、培養による生活史の解明、有用海藻の増殖と品質の問題から広く環境汚染などの問題にまで及んだ。研究も国内だけでなく国外でも盛んに行われた。カナダに滞在中かと思うと突然スペインやスコットランドなどから手紙が届き、日本で仕事かかと思うとドイツから便りがくるといふ忙がしきであった。尾形さんは常に何かを生みださずにはいられないタイプの研究者であった。この特徴が、しかし、結果としては、46歳の働き盛りの尾形さんの命取りとなってしまったように思う。

応用理学としての水産学、そして、海藻を対象とした水産学はどうあるべきかを常に自問し、自身の研究を通して一つの答をだそうと努力し続けた尾形さんであった。理学と応用理学の境界領域の研究の重要性がいよいよ大きい今日、尾形さんを失った損失はまことに大きい。ご冥福を祈る。

* 東京教育大学理学部植物学教室 東京都文京区大塚3丁目29-1